支那文化の源泉

梅原末治著

近時長足の進歩を遂げた支那の考古學的研究の結果に依つて、支那文物に關する知見は著しく開明の域に進むに至つた。勿論、西歐、近東或は本邦の研究に較べると猶未開の域に在ると云はざるを得ないが、それにしても信用すべき一括遺物の發見があり、此等に關する研究報告が漸次發表されつゝあるは欣快に堪えぬ。

偖て本書は著者が日頃此等の一括遺物を以つて「ステッピング・ストン」とし、悠久な支那文化の源泉を體系的に理解せられんとしつゝある態度と其の結果とを平易に讀者に向つて披瀝したものに外ならぬ。先づ其の內容を見るに、(一)舊石器時代の文化、(二)二種の新石器時代の文化、(三)鬲形土器と彩文土器の性質、(四)河南省殷墟と其の示現する文化、(五)周の盛世と戰國式文物の出現、並びに(五)漢代の文物に就いて記述し、「支那古代の特色ある物質文物の萠芽は早く史前の時代北支那の黃河流域に發したものであつて、其の銅の使用の知識は、古く西方から波及した彩文土器と連關するやにも思はれるが、而も爲に本來の特色に著しき變化を與ふることなく、それ自體の發展を續けて彼の殷墟の遺品に見るが如き色彩の著しい文物を成立せしめたものと見られる。そして此の文物が一の固定的な傾向を持つて周代につゞいたが、其の後北方游牧民の齎した西伯利亞を經由した西方文物の刺戟に依つて戰國樣式となり、更に引續いた西域經由の文物の影響の下に支那固有文物が新しい裝をした漢代の文物を生むに至つた」ことに就いて殊に力說さ

れ、猶彩文土器に關してはアンダーソンの年代觀に就いて鋭利なる批判を向け、更に殷墟の示す文化段階に就いても、金石併用期とする從來の所見に反對し、これを以つて青銅器時代、而も其の後半と解釋すべきことを主張して居る。

以上甚だ簡略な紹介に終つたが、本書は支那古代文物に就いて、著者の專攻する考古學的立場から、現在迄に達し得た遺跡遺物に關する知見を一々明瞭に紹介され、其の示す事實の上に立つて考へ得た諸卓說を叙すると共に今後開明さる可き問題の所在を明示したものである。蓋し、東洋思潮諸論著中に於て異彩を放つ力作たるを失はぬ。

猶、最後に慾を言へば各章末に註を附して參考資料、報告書の類を教示され、加之若干の附圖の類を掲載して戴き度かつた。

（小　野　勝　年）